

研究報告書

一般課題：B

(平成28年度)

令和2年4月30日

公益財団法人 がん研究振興財団

理事長 堀田 知光 殿

研究施設 埼玉医科大学 緩和医療科

住 所 埼玉県入間郡毛呂山町毛呂本郷38

研究者氏名 金川 潤也



(研究課題)

終末期がん患者の筋筋膜性疼痛の頻度と部位を調べる多施設前向き観察研究

平成29年3月10日付助成金交付のあった標記一般課題：Bについて研究が終了致しましたのでご報告いたします。

研究報告書

「がん緩和ケア患者の筋筋膜性疼痛における頻度における多施設共同研究」

金川 潤也

【目的】筋筋膜性疼痛(Myofascial pain syndrome;MPS)は筋肉の過緊張や過収縮によって起こる筋原性の痛みである。本研究は痛みを訴えるがん患者における MPS の頻度、リスク因子とトリガーポイント注射(TPI)の効果を探索する目的で行った。

【方法】多施設前向き観察研究。国内5施設で1)緩和科に紹介された入院患者 2)根治不能な固形がん 3)20歳以上 4)登録前24時間の痛みの平均NRS \geq 4を満たす症例に対し、MPSの頻度を調べ、MPSの有無を従属変数、体動制限のリスク(年齢、性別、遠隔転移、Performance status(PS)、医療デバイスの有無)を独立変数として多変量解析を行った。主要評価項目はMPSの頻度(Riversの診断基準)、副次評価項目はMPSのリスク因子、TPIの効果とした。

【結果】2018/3-2018/12に101例が登録された。患者背景は年齢65(31-91)歳、男/女 42/59、原発巣(頭頸部/肺/消化管/肝胆膵/乳腺/婦人科/その他):5/31/25/15/4/11/10、PS(0/1/2/3/4):2/20/30/44/5だった。このうち45例(44.6%)にMPSを認め、多変量解析ではPS3-4がMPSのリスク因子だった(オッズ比7.48, 95%CI 1.6-34.7, $P=$.010)。TPIを44例に実施し、疼痛NRSは実施前8.0→実施後4.2に改善した($P<$.001)。

【考察】痛みのあるがん患者は高頻度にMPSを伴っている。MPSの治療はがん疼痛とは異なるため、これを見逃さぬよう丁寧な身体診察による評価が重要である。